

「小さな命に生かされて」

野田 えい

我が家にはチャゲという名前の猫がいます。チャゲは次女が小学校2年生の時、物置の段ボール箱の中に野良猫が産んだ4匹の子猫の中の1匹でした。娘は飼いたがったのですが、当時我が家にはアスカという名前のビーグル犬がいました。私の考えは犬がいる上に猫まではという思いでした。そこで家族で相談した結果、主人と次女が保健所に連れて行くことになりました。かわいそうだけど、うちでは引き受けられない命なんだと私は割り切ったつもりでした。随分時間が経ち、2人が帰ってきた気配がしたので出迎えに行きますと、夕暮れの玄関先に、主人と子猫を抱いた次女がしょんぼりと立っていました。しかし私は、娘と子猫を見た瞬間、「あーよかった！」とホッとしている自分に気が付きました。今考えてみると、自分の都合で子猫の処分を主人と娘に預けて、そのことから逃げていた自分がくっきりと浮かんできます。綾小路きみまろさんではありませんが、「あれから20年」、祖父母と私達夫婦、子ども3人、犬・猫1匹ずつの大家族は、今私達夫婦と猫1匹だけの生活になりました。

ニャーニャーとよく喋り、生活を共にするチャゲはなくてはならない存在です。

チャゲの拾いの親だと言う次女が、かけがえのない命を繋いでくれました。

自分の都合による自己中心の判断が破れ、20年経って穏やかな安らぎをもたらしてくれています。